
怪しいバイトは真夏の太陽の下で<続・番外編集>

楠瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪しいバイトは真夏の太陽の下で<続・番外編集>

【Nコード】

N8256V

【作者名】

楠瑞稀

【あらすじ】

破格の報酬に惹かれて始めたアルバイトは、真夏の暑さも忘れるようなとんでもない仕事だった。果たして健介の次の仕事とは・・・？ 罰当たり現代ホラー風コメディ『怪しいバイトは真夏の太陽の下で』(N4411J)の続編・番外編をまとめました。よければそちらとあわせてお読みください。(作者のHP『飛空図書館』に掲載されているものと同じ作品です。)

消毒（番外編1）

「夏の風物詩と言えば？」と問われれば、なにかしらの名称を誰しも一つや二つすぐにあげることが出来るに違いない。

海水浴、花火、甲子園、キャンプファイヤー、山登りなどなど。

夏は楽しいイベントごとには事欠かない季節だ。

ただ中にはあまり嬉しくない風物詩だってある。

「昨晚さあ、部屋に蚊が入ってきて大変だったんだよねえ」

少し離れたオープンテラスからそんな会話が聞こえてくる。

「耳元でブンブンうるさくて眠れないし、やんなっちゃう」

「えー、マジ災難じゃん。ミポリンついてない」

「でしょー？ 虫除けスプレー撒けばいったんはいなくなるんだけど、しばらくするとまた戻ってくるしさー」

ちらりと視線を向ければ、夏期講習の帰りなのか。セーラー服の女子高生同士がフラペチーノを突っつきながら親しげに話している。

この年頃の女の子は、クローン人間かドツペルゲンガーかというほど良く似ているため、どちらがどちらなのか無粋な俺には見分けが付かない。もっともミニスカートからのぞく眩しい4本の生足のうち、ぼちりと腫れた虫刺されの痕を痒そうにしているのがミポリンであることは想像に難くはなかった。

「お待たせいたしました、生クリームたっぷりのスーパーデラックス塩キャラメルフラペチーノ、アーモンドスライスとチョココレートソースの二倍掛けになります」

俺は彼女たちから視線をはずして、クーラーの効いた室内のテーブルに注文の商品を置く。見るからに甘ったるそうで顎が外れかねない飲み物なんだかデザートなんだかを前に、席に着いていた客は目を輝かせた。

「わあ、ありがとう。健介」

「……お前さ、人のバイト先に来るなよ」

お冷を継ぎ足す振りをしながら俺はこっそり話しかけるが、そいつは悪びれないのんきな笑顔でこう返してきた。

「ええー、いいじゃん。俺、健介が普段どんなバイトしているのかわてみたかったし」

もうこいつは客でもなんでもない。俺は頭の中で素早く意識を切り替える。

こいつは早乙女昌彦と言って、俺と同じゼミに所属する同級生だ。気前が良くて人当たりも良いこの男は、柔和な笑みが可愛いなどと言われゼミの女どもの間では評判が良いのだが、一方の俺はこいつのその羽振りの良さがどうにも気に食わなかった。まあ、単なるやつかみと言えばその通りなのだが。

しかし縁とは妙なもので、少し前から俺は早乙女のアルバイトを手伝うようになった。破格の報酬が見込めるそのアルバイトは苦学生のためには実に助かる稼ぎとなるのだが、儲けがいいだけあってまともな仕事でないことも確かだった。

「そう言えば聞いてくれよ、健介」

早乙女はフラペチーノを口いっぱい頬張りながら俺に話しかけてくる。口の周りに生クリームが付いているが、多分そういうところには母性本能をくすぐられて、まんまと可愛いとか言い出すんだろつなと俺は思う。だからと言って真似しようとは欠片も思わな

いが。
返事をしなかったのにも関わらず、早乙女は当たり前のように会話を続ける。適当に聞き流そうと思った俺だったが、その話の内容はもの見事に俺を凍りつかせた。

「昨晚さあ、寝室に落ち武者入ってきて大変だったんだよ」

「はあっ？」

返事はしまいと置いていたのに、素っ頓狂な声が口をついて出る。

「ああ、もちろん幽霊ね。本物じゃないから」

本物であってたまるかよ、と思いつつももつとも幽霊の落ち武者

とと生きている落ち武者、どっちがマシかと言われたら返事に困るのは間違いない。

「耳元でガシャガシャ鎧がうるさいし、眠れなくて困ったよ」

あはははと早乙女はほがらかに笑う。

怖がっている様子が欠片もつかげない口調だが、それもそのはず。早乙女がしているアルバイトは幽霊退治のアルバイトなのだ。

幽霊退治と言っても大抵は昼間の仕事だし俺としては害虫駆除に近い感覚だが、当の早乙女自身はやはりこういった話題がさりと口に出る程度には幽霊と縁があるらしい。

「お経を唱えればいったんは消えるんだけど、すぐにまた戻ってきてさあ」

嫌になっちゃうよね、と同意を求められても俺はうなずけない。

そもそもそういった経験がないのだから当然だ。もっとも、早乙女のアルバイトを手伝っていけば、やがては俺も似たような出来事に遭遇するようになるのだろうか。それはかなり嫌だけれど、金の誘惑には逆らえないのだから仕方がないと割り切るべきか。

「ま、これも夏の風物詩だけどね。そろそろお盆が近いし」

いや、そうじゃないだろう。そんな夏の風物詩があるのは、お前だけだから。俺は顔を引きつらせるが早乙女は気付かない。

「やっぱりお札貼らないとだめかなあ。あ、ちなみに俺のお勧めは円楽寺ね。峰願寺もいいんだけど、効果の持続時間の割に高くってさ」

活用場所を見出せないお徳情報を否応なしに聞かされてうんざりしていた俺は、早乙女の背後に視線を向けた途端そくりと背筋が冷たくなった。

「……お前、それ食ったら帰れ」

「あ、オレ健介の仕事の邪魔になってた？」

「いいから」

強く言い含めると、早乙女はしぶしぶとうなずいてフラペチーノを再び食べ始める。

「じゃあ、次の仕事の詳細については後でまたメールするからな」
その言葉に適当にうなずいて、俺はホールに下がった。なんとなく店の室温が下がったような気がするのだが、たぶん思い違いではないはずだ。冷房代の節約になるかと一瞬思ったが、いやいや駄目だろうと考え直す。万が一客が体調不良を訴えられたら、下手をすれば食中毒扱いで営業停止になってしまうじゃないか。

食中毒もある意味夏の風物詩だが、自分のバイト先で濡れ衣はごめんだ。なので早乙女が座っていた席は、あとでしっかり消毒をしなければいけないなと俺はため息をつく。それとも虫除けスプレーを撒いたほうがいいのだろうか。

「あのまま早乙女にくっついていなくなってくれればいいんだけどなあ」

噂をすれば影が差すとは、どうやら人間だけに適用される言葉ではないらしい。

俺は早乙女の背後に見た古めかしい半透明の手甲を思い出してため息をつく。

話につられてやってきたらしい落ち武者の気配を追い出すにはどちらがいいかと、俺は後始末に頭を悩ませることになったのだった。

怪しいバイトは真夏の波打ち際で

ふつう夏休みの旅行先といえ、海か山かの二択から選ぶのが無難な選択肢だと思われる。

もしかしたらハワイのショッピングモールで買い物。あるいはスイスに行ってちよいとスキーを、なんていうセレブな選択肢から選ぶ奴もいるだろうが、そんなのはきわめてごく少数だ。むしろ少数であって欲しい。

ちなみに俺は海でも山でもどちらでもいける口だ。太陽の日差しがまぶしい浜辺で、カキ氷やフランクフルトを食べながら青い海を眺めるもよし。容赦ない熱気がこもる下界を離れて、自然豊かな山ですがすがしい冷涼な空気を胸いっぱい吸い込むもよし。まさにこれこそが、夏の正しいレジャーの形だろう。

もつとも実際のところ俺は、ここ数年そんな楽しい選択肢にいきあつたことは一度もない。むしろ一も二もなくバイトバイトの一本勝負だ。悲しい苦学生の現実がここにある。

だが、いつの日か金銭的な余裕と時間的な余裕を得られることができた暁には、芋洗いの海水浴場でも閑古鳥が鳴く鄙びたキャンプ場でも喜んで行ってやる。というのが、俺がひそやかに抱いている野望なのだ。

ずいぶんしょぼい野望だとは言ってくれな。隣に美人の彼女を連れてという譲れない前提条件がつけられ、それも立派な野望となるだろう。

だからそれまではどんな甘い誘惑も断固として跳ね除けて、と今年も決意をあらたにした俺に、一本の電話がかかってきた。夏休みも中盤に差し掛かった真夏の昼下がりに。うだるような暑さの午後のことである。

携帯電話を耳に当てたとたん、どこかのん気で楽しげな声の持ち主は開口一番俺に向かってこう言った。

「なあ、健介。海に行かない？」

よし、分かった。その喧嘩、買ってやる。

反射的に殴りに行くことを決意した俺だったが、相手が早乙女昌彦であることに気がついて踏み出した足を引っ込める。もしやこれは遊びの誘いではなくバイトの連絡では無いかと気付いたからだ。

早乙女は俺の大学の同級生で同じゼミに所属している仲間だ。柔らかな笑みを浮かべ、ゼミ室に気前良く手土産のケーキやら飲み物をちよくちよく持ってやってくるような男で、女どもからはまるでお公家さんみたいで可愛いよね、という良く分からない評判を得ている。

もっとも俺はそんな早乙女に対しては、特にその金回りの良さに気後れ半分やつかみ半分といった複雑な感情を抱いていたのだが、奴にバイトを紹介された縁で最近はともに行動することが多くなっていた。今回も単なるゼミ仲間の連絡網ではなくバイトの件かと考えたずねてみると、どんぴしゃだ。まったく紛らわしいことこの上ない。

「それで、いつから行くんだ？」

バカンスで海に行くのはまだ良しとしない俺だったが、仕事となれば異を唱えるつもりはない。むしろ儲かるならば針の山でも血の海でも行ってやるうじゃないか。日程を確認すると奴はよどみなく二泊三日分の期間を答えた。前々からその時期は繁忙期だとは聞いていたがついに来たかと俺は小さく息をついて覚悟を決める。

それはまさにこのアルバイト　幽霊駆除屋に相応しい、お盆のシーズン真っ只中だった。

早乙女が俺に持ちかけたバイトとは、いわゆる幽霊退治の仕事であった。早乙女は害虫駆除のようなものだとかたくなに言い張っており、いわゆる霊媒師の行う除霊なんかとは大きく違うわけだが、それでも幽霊退治の仕事であるというのは同じだろう。

早乙女がいったい何処から依頼を受けているのか、なんでこんな仕事をしているのかは知らないが、俺は早乙女の助手という形でアルバイトを行っている。

血まみれの幽霊に追いかけられたり、落ち武者に遭遇したりとけつして割の良いバイトではないのだが、それでも早乙女の呼びかけを断れないのは他でもない。このバイトが余所よりも圧倒的に稼ぎの良い仕事だから。地獄の沙汰も金次第。幽霊退治も報酬次第ということだ。

もっとも怖いものは怖いというのも事実なので、できれば今回の対象が怨念こもった恐ろしい幽霊でないことを俺は祈るばかりである。

俺と早乙女は、ライトバンに乗って数時間かけてとある海辺の町までやってきた。

栄えているとはいわく言いがたい片田舎ではあるが澄んだ海が立派な観光資源となっているらしく、海水浴客に一円でも多く金を落としてもらわんがため数多くの土産物屋が賑やかに軒を連ねていた。だが見渡すまでもなくどの店も、今は盛大に閑古鳥が鳴いていた。いくら鄙びた海水浴場だとは言え、そしてレジャーには向かないお盆の時期とは言え、この寂れ具合はただ事ではない。

海の底深くに沈み込んだような物寂しい町の様子に不振な思いを抱きながら浜辺に辿りついた俺は、そこでさらにその異様さを確信した。

南の海を思わせる白い砂浜……とは言えないが、それでも海水浴にちょうど良い細かい砂で満たされたごく標準的な遠浅の海岸。降り注ぐ太陽光が水面に反射してきらきらと照り輝き、水平線の向こうには入道雲がもくもくと湧き立っている。まさにこのまま海に飛び込みたくなるような、見事な海水浴場の風景だ。だが、
「いやあ、まさにプライベートビーチって感じだね」

眩しい太陽の日差しに目を細めながら、麦藁帽子を被った早乙女

が能天気な感想を述べる。

本来なら溢れんばかりの人でにぎわっているはずの海岸には、人っ子一人いなかった。

「なんだ、こりゃ……」

啞然とする俺の隣で、早乙女はいつもどおりのほほんとした口調で答える。

「原因はあれだね」

伸ばされた指の先を追っていくと、そこには毒々しい赤い文字で「遊泳禁止」と書かれた立て札があった。

泳いでくれと訴えて来んばかりの遠浅の海岸で、「遊泳禁止」の文字ほど違和感のあるものはない。臨時休業と書かれた海の家の子を見るに、どうやらこのお触れが出たのはつい最近のことであるらしい。

収入の半分を夏の行楽シーズンで得ているような町で、海で泳げないというのは死活問題ではないだろうか。それを考えれば、暗く落ち込んだような町の様子にも納得がいく。

「大変だな、こりゃ。サメかクラゲでも出たのか？」

毒をもつクラゲの大群や人食いサメでも現れたのならいくらなんでも海水浴客を招く訳には行かないだろう。俺のつぶやきに早乙女はにこやかにうなずいた。

「そうそう、良く分かったね。クラゲじゃないんだけど、良く似た厄介な奴らが大量発生しちゃったんだよ」

ほらこれ、と早乙女は一枚の写真を差し出してくる。良く似た厄介な奴ら、という言葉に嫌な予感を覚えつつ目をやった俺は、思わず息を呑んだ。

その写真はよくあるスナップ写真だった。そこにはこの海を背景に、微妙に腹立たしい感じで抱き付き合ったカップルが仲良くピースサインをしている。そう、ここまでいい。ここまででは普通の写真だ。だから問題なのはその背後。

俺の目を奪ったのは海面から突き出た何本もの青白い手、手、手、

手、手、手、手……。無数の手の存在だった。腹の芯から怖気を掻き立てるその不気味で異様過ぎる光景は、それが単なるいたずらやトリック写真ではなく、明らかな心霊写真であることを俺に直感的に伝えている。

「海開きになつて間もない頃、他所から来た観光客が近くの神社のお社をふざけて壊したらしいんだ。それ以来、海水浴客が海の中で足を捕まれひきずりこまれる事件が起こり始めた。お社は無事に直したんだけど、被害は増える一方で、ついにはこんな写真まで撮られる始末なんだ」

早乙女はあっさりとした口調でそんな洒落にならない話を告げる。俺がかろうじて叫びださずに済んだのは、その何百本もの手がカップルと同じようにピースサインを作っていたからだろう。

海面から突き出す無数の青白いピースサイン。これ以上にシュールな光景はそうそうない。

色々な意味で絶句していた俺は、どうにか我を取り戻し平然と写真を除きこんでいる早乙女におずおずとたずねる。

「なあ、まさかこれが……？」

「そう、今回の駆除対象ね」

「マジかよ」

俺は思わず天を仰ぐ。まぶしい真夏の太陽が視界を白く塗りつぶした。

「あんな大量の『手』を、いったいどうやって駆除するっていうんだ？ 本当に大丈夫なのか？」

俺は不気味なものを見るような気持ちで、青い海を横目に捉えながら早乙女にたずねる。あんな写真を見てしまうと、先ほどまで気持ち良さそうに見えた海がとたんに不気味で恐ろしいものであるように思えてしまう。

「まあ、やってやれないことはないって」

早乙女はあっけらかんとした口調で答えて、停めておいたライトバンへ向かい荷台から積荷の一部を降ろしはじめた。俺もそれを手伝う。

荷台には水の詰まった大型ポリタンクがいくつもあったり、バケツやらロープやら支柱やらがあったりとはんぱんぱんになっている。むしろこうした大量の荷があったからこそまで来るのにライトバンを使うことになったのだ。

俺たちはまず支柱とロープを降ろし、何往復もして波打ち際まで運んだ。

「じゃあ、さっそくこれを組み立てようか」

いったい何に使うのかまったく想像がつかないまま、俺は言われたとおり支柱とロープを組み立て始める。これでビーチバレーの会場でも作るのかと冗談交じりに考えていたのだが、完成したのを見るとそれは当たらずしも遠からずだった。

「ぱ、パン食い競争……？」

二本の支柱の間にはロープが渡されており、そのロープには短いロープが何本も吊り下げられている。先にパンを括りつければそのままパン食い競争に使えるそうだ。いや、それにしても若干吊り下げのためのロープが長すぎるか。

「あはは、パンは下げないよ。代わりに一枚ずつこれを下げてくれないか」

そう言われて差し出されたのは、人の形に切られた白い紙だった。紙には一枚ずつ文字が書かれているのだが、達筆すぎて俺には読めない。

「なんだこりゃ？」

「ふふ、秘密兵器さ。まあ、数が多いからさくさく付けてこうぜ」
確かに渡された紙の束は百枚以上を優に数える。そして早乙女自身も同じくらいの束を持っている。膨大な作業に閉口した俺は、そのまま黙々と作業を始めたのだった。

すべての作業が終わった時には、もう太陽は西の空に沈みつつあ

った。

紙の人形をロープに括りつけた後は、支柱を波打ち際に設置する作業があった。だがそれもまた数が多く、さらにロープが繋がれた支柱は重く、すべての作業が終わったときには、俺はもうくたくただった。

「疲れた……」

俺はそのまま砂浜に座り込む。夕日に照らされた浜辺には照る照る坊主のように吊るされた大量の紙人形が潮風にあおられてひらひらとなびいていた。

「あはは。お疲れさん、健介。次の作業は明日の朝からだから、今日は宿に行つてゆっくり休もうか」

さすがにくたびれたらしく、首から提げたタオルで流れる汗をぬぐいながら早乙女が言う。

「宿……？ あんまり宿代がかかるようなら、俺は車の中で寝泊りするぞ」

というか、俺は元よりそのつもりだった。金を稼ぐために来て金を使うようでは本末転倒だ。金を稼ぎたいのならば無駄遣いは厳禁である。

「ああ、それは大丈夫。町の人が全面協力してくれていて、宿代も要らないって言うてくれているから」

そう言うて早乙女はにっこりと笑う。

全面協力というよりかは、おそらく今回の幽霊駆除は町ぐるみでの依頼なのだろう。本当に早乙女はどうやってこの仕事を得ているのかと気にしながらも、文句は言わず宿へ向かう。そして俺は新鮮な海の幸に舌鼓を打ち、やがて疲れからそのまま朝までぐっすりと眠り込んでしまったのだった。

翌朝、俺たちは再び砂浜まで降り立った。

まだ日が昇つて間がないため、空気は清しく砂が焼けて熱いという事もない。それでももうしばらくたてば思わず泳ぎたくなるよ

うな天気になるだろう。ただしそれも、無事に幽霊が退治されていればの話だ。

夜の間、打ち上げられたらしい漂流物やゴミ、海草などを避けながら昨日の場所に帰ってきた俺は、そこにある光景を見て絶句した。パン食い競争のパンのように紙人形を吊り下げたロープ。そこには一つ余さず、青白い手首がぶら下がっていた。

「な、なんだこりゃあぁっ!?!」

「おお、大漁だね」

喜色満面の笑顔で早乙女が近づいていく。

「お、おいつ。なんだよ、これはっ」

腰が引けて近寄れない俺を早乙女は不思議そうな顔で振り返る。

「なにつて、例の幽霊」

「なんでこんなことにつ!?!」

手首はまるで観光名物の干物のように吊り下げられて、ひらひらと揺れている。

「うん、この紙人形はね、形代なんだよ」

「かたしろ?」

聞いた事のない言葉に、俺は首を傾げる。

「ようするに身代わり人形だね。昨日、この人形を吊るして置いておいただろう? 昨日は大潮だったから、潮が満ちた頃この人形は海の中に沈んだ。幽霊たちはこの人形を人間だと思っただけで、書いてあるお経のせいで手が離れなくなってしまったというわけ」

つまりあの紙人形に書いてあった文字はお経だったというわけだ。

「ようするに仕掛け漁みたいなものかな」

「いや、全然違うだろ……」

俺はがっくりと肩を落とす。

「それで、この手首たちはどうするんだ? このまま天日干しにでもするのか?」

このまま干していれば、二、三日で手首の干物ができそうだ。

冗談で口にした言葉だったが、早乙女は大真面目に答える。

「うん、そういう方法もあるんだけどね。それだとさすがに時間がかかりすぎるから」

そう言つて、ライトバンからバケツとポリタンクを持つてくる。

早乙女はポリタンクの中の水をバケツにあける。そして手首を水の中に漬け込んだ。そのまましばらく眺めていると、驚いたことに、手首はどろどろと溶けていつてしまったではないか。

「うわぁ、すげえ！」

俺は思わず感心して声を上げる。

「この水、聖水か何かなのか？」

「そう、その通りだ。この水はある神社の境内から湧き出している水で、破魔の力を持つ霊水なんだ」

早乙女はうなずく。

「この霊水は真水だからね。普段はより塩分濃度の高い海水の中にいる霊を入れると、浸透圧の違いによって膨張して最後には破裂しちゃうんだ。オレたちは、そうした現象を利用して幽霊を駆除しているのさ」

「霊水、関係ないじゃんっ！！」

俺は思わず叫ぶ。

しかも浸透圧の違いで破壊されるなんて、赤血球か何かかよ。

俺は思わず脱力して座り込みそうになった。

「おいおい、のんびり座っている暇はないぞ。なにしろ全部の幽霊手首を漬け込まなきゃいけないんだからな」

「分かったよ！　ところで幽霊入りの水はどうするつもりなんだ？」

「帰り道の途中に霊験あらたかなお寺があるからね。その境内に撒いて浄化してもらうつもり。木の根本に撒けば良い肥料にもなるし」

「いいの、それはっ！？」

「いいのいいの。ほら、ちゃっちゃと作業に移るぞ」

そうして俺たちはじりじりと照りつける日差しの下、大漁の手首を水に着けるといふ良く分からない作業に没頭することになった。

ちなみに幽霊水を捨てに行った寺では、さらに別の仕事が待っており「お盆が繁忙期」という早乙女の言葉には嘘偽りはないと俺は再びげんなりすることになる。これで給金が高くなければまったくやってられない。

もっとも後日聞いた話によると、幽霊が駆除された海水浴場にはすぐに行楽客が戻ったらしく、どうにか海水浴シーズンに間に合わせる事ができたらしい。観光客の評判も上々のようだ。

俺は泊めてもらった宿での海の幸の味を思い出し、いつか理想の彼女と来る海はここにしてみたいかも知れないなど、そんなことをちらっと考えたのであった。

【終】

怪しいバイトは真夏の波打ち際で（後書き）

この作品は「競作小説企画 第五回「夏祭り」」(<http://www.geocities.jp/sagittat/matunris/>)の参加作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8256v/>

怪しいバイトは真夏の太陽の下で < 続・番外編集 >

2011年8月16日03時24分発行